

高校の段階で
もっと大学教育に
触れる機会を

大学は高大接続に どのように取り組んでいるか

「大学入学共通テスト(仮称)」「高校生のための学びの基礎診断(仮称)」の概要が明らかになるなど、高大接続改革に向けた動きが進んでいる。同時に、高校・大学それぞれの現場でも、高大接続を意識した新しい取り組みが広がりを見せている。なかでも、大学と高校が連携し、高校生に「大学での学び」を体験させるアプローチには、どのような意義や可能性があるのだろうか。リクルート進学総研所長の小林 浩が解説する。

取材・文／伊藤敬太郎

社会が大きな転換点を迎えるなかで 次代を担う人材に求められる能力も変化

今、高大接続が求められている最大の理由は、社会そのものが大きく変化しようとしていることにある。未来の社会では求められる人物像も大きく変わる。そのためには旧来型の教育を抜本的に変えることが必要。この改革を握る重要な視点が「高大接続」なのである。

元文部科学省高大接続システム会議委員でリクルート進学総研所長の小林 浩は次のように解説する。

「かつての日本には欧米という成功モデルがありましたから、知識を暗記・再生する教育で全体の向上を図ることができました。人口も増えていくなかで、高等教育に進む人数を量的に増やす方法がうまくいっていたのです。それに対して、これからは人工知能やIoT(モノのインターネット)などの技術革新による、

第4次産業革命ともいわれる変化の時代が訪れます。成功モデルが存在しないなかで、社会を支える人たちに今までとは異なる能力が求められるようになるのです」

それを端的に示したのが、例えば、国際団体ATC21Sが提唱する「21世紀型スキル」(図1)。そこで求められているのは、知識の量ではなく、「創造力とイノベーション」「批判的思考」「問題解決」「コラボレーション」などの力だ。

日本でも、「学力の3要素」(図2)に、未来の社会で求められる力を示した。「知識・技能」は基礎となる力として必要とされるが、それだけではなく、知識・技能を活用し、課題を解決するための「思考力・判断力・表現力」、さらに「主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ力」を養うことが大きなテーマになっている。

このように、求められる能力や「学力」のとらえ方が大きく変わってくるなかで、課題となっているのが教育の連続性・一貫性

図1 ATC21Sが定義する「21世紀型スキル」

▶ 思考の方法

- ① 創造力とイノベーション
- ② 批判的思考、問題解決、意思決定
- ③ 学びの学習、メタ認知(認知プロセスに関する知識)

▶ 仕事の方法

- ④ コミュニケーション
- ⑤ コラボレーション(チームワーク)

▶ 仕事のツール

- ⑥ 情報リテラシー
- ⑦ ICTに関するリテラシー

▶ 社会生活

- ⑧ 地域と国際社会での市民性
- ⑨ 人生とキャリアの設計
- ⑩ 個人と社会における責任(文化に関する認識と対応)

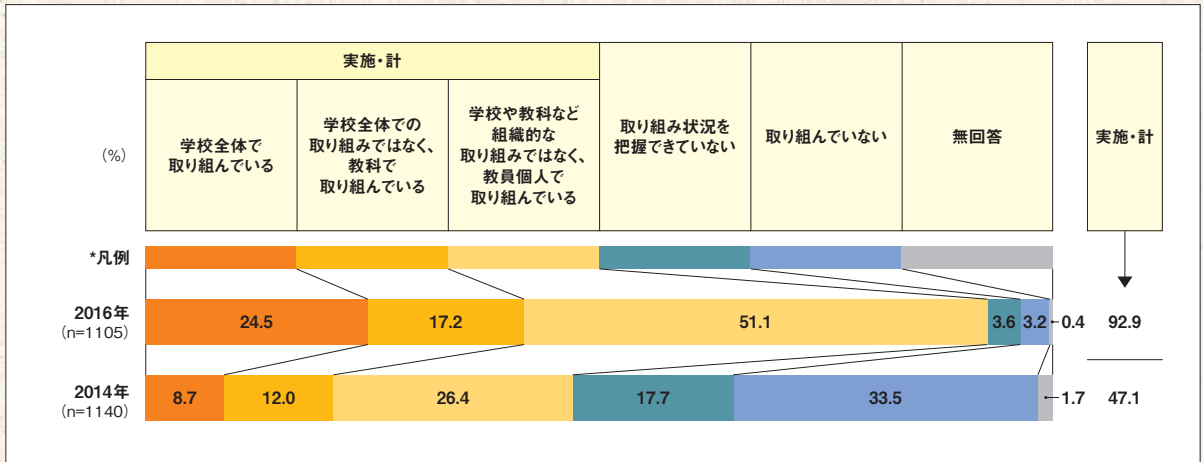
図2 学力の3要素

① 十分な**知識・技能**

② 答えが一つに定まらない問題に
自ら解を見いだしていく
思考力・判断力・表現力

③ **主体性**をもって**多様な人々と
協働して学ぶ態度**

図3 アクティブ・ラーニングの視点による授業の実施状況



出所／リクルート進学総研「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査2016」

だ。創造性や主体性、協働力などは、短期間で一気に養うことができる力ではない。高校、あるいはそれ以前からの教育と、大学での教育を接続し、一貫した人材育成に取り組むことが必要になってきているのである。

「現状の問題は、大学が偏差値で評価され、高校生にとっては、より偏差値の高い大学に入学することがゴールになってしまっていることです。『何のために大学に行くのか』を考えずに進学するため、4年間で約1割が中退してしまうというミスマッチも起きています。これは細かな知識の量を問い、一点刻みで評価する現状の大学入試が、高校生の意識や、高校教育を規定してしまっていることが大きな要因。そのため、国は高大接続を目的とした大学入学選抜改革に取り組んでいるのです」

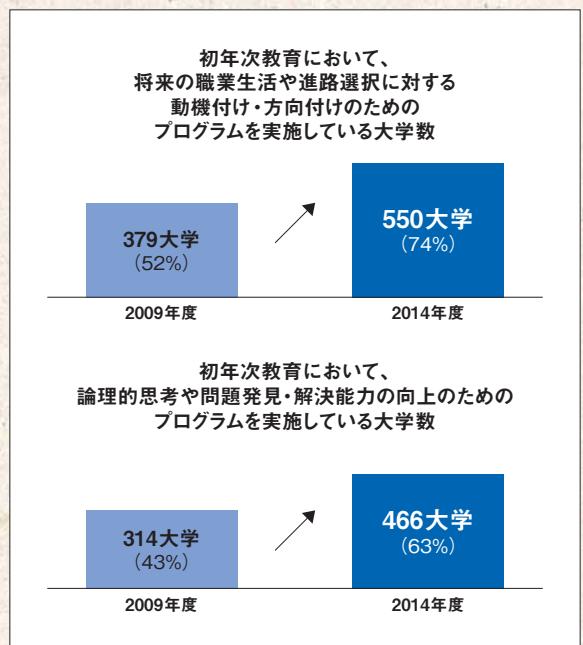
次期学習指導要領が掲げる 「社会に開かれた教育課程」

学力の3要素を問うことを目的とした「大学入学共通テスト（仮称）」は2020年度にスタート予定。また、大学の個別入試に関しても、「学力の3要素」をバランス良く測る内容へと変革することが提案されている（詳細は本誌特集にて解説）。同時に、高校の教育もこれに沿った内容に変わっていくことが次期学習指導要領では明確に示されている。

その一つが、生徒の資質・能力を育成する「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニングの視点による学びの改善）で、すでに実践フェーズに入っている。

高校におけるアクティブ・ラーニング（AL）の視点による授業の導入は、リクルート進学総研の調査によると図3のとおり。2014年には、何らかのかたちでALの視点による授業を実施している高校は47.1%だったが、2016年には92.9%に増加している。現場では試行錯誤を繰り返しながら、成功事例の共有も進み、思考力・判断力・表現力はもとより、主体性や協働力の養成につなげようと努力が重ねられている。

図4 大学の初年次教育における取り組み



出所／文部科学省「平成26年度の大学における教育内容等の改革状況について」2016年12月

一方、大学では、初年次教育で、大学での学びを将来に結びつけるためのキャリア教育や、大学での学びに対応するための論理的思考力や問題解決力を早期に養成する動きが活発になってきている（図4）。こちらは、前述の、新入生と大学教育との間に起きているミスマッチを解消するための取り組みだ。

そして、もう一つ、大学が高校生に対して、大学での学びを早期に体験させる動きも広がりを見せている。

「次期学習指導要領は『社会に開かれた教育課程』というメッセージを掲げています。高校という閉じた世界の中で先生だけから学ぶのではなく、地域、企業、そして大学という外部の人たちから学ぶことの必要性も唱えられているのです」

高校生が大学生と一緒に大学の授業を受ける、大学の教

図5 教育面での高大連携の主な取り組み

高校生が大学の正規授業に参加	高校生が、一定期間、大学の授業に大学生と一緒に参加する。聴講するだけにとどまらず、履修した科目を高校の単位として認定する例もある。
大学の授業を高校にネット配信	大学で行われている授業をネット配信し、高校生が高校にいながら聴講・履修できる取り組み。近くに大学がない地域でも導入可能なため、広がりを見せている。
大学教員が高校で講義(出前講義)	大学で教える内容を高校生向けにカスタマイズして、大学の教員が高校で講義。高校生は大学での学び方や、学部・学科での学ぶテーマのエッセンスを体験できる。
大学で高校生向けの特別講座を実施	大学の教員による「大学での学びが将来にどうつながるか」といった講演や模擬授業など。オープンキャンパスで開催している大学も多い。
大学・高校・社会が連携したPBLを実施	高校と大学に加えて、企業や地域も加わったプロジェクト学習。高校生が商品開発や地域の課題解決に取り組み、大学生がファシリテーターを務める。

員が高校で出前講義をするといった従来からの取り組みに加え、大学生がファシリテーターとなって、高校生と共に課題解決に取り組むといった新しい動きも始まっている(図5)。

「何のために大学で学ぶのか」という進路選択に不可欠な視点が養われる

このような大学と高校のコラボレーションは、より直接的に高校生の気づきや成長を促す機会として注目されるものだ。

「高校での学びと大学での学びは大きく異なります。しかし、今までは、高校生は大学に入学するまで、大学での学びについて知る機会が限られていました。そのため、入学後に『学ぶ内容が思っていたのと違う』『自分の学力ではついていけない』という状況に陥るのも無理はなかったのです。大学での学びを早期に体験する機会を豊富に設けることは、高校生の進路選択にとっては大きなプラスでしょう」

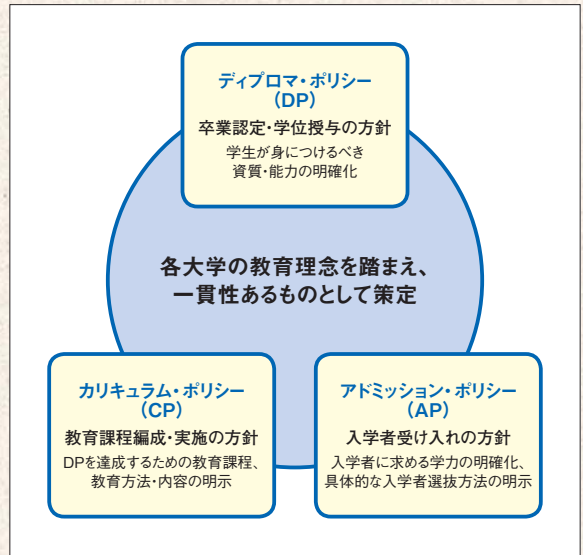
高校では、キャリア教育や地域・企業と連携した教育を通して「社会に出て何をするか」をいう視点を養うことに取り組んでいる。ここに大学との連携が加わることで、「今」と「社会に出たあと」をつなぐ、「大学で何を学び、どう成長するか」という視点も養われる。高校生は、高校・大学・社会という接続した流れの中で、自分自身の学びをとらえることが可能になるのだ。

受験のために知識を詰め込む教育では、高校生はどうしても受け身になりやすい。それに対して、社会で活躍する自分の姿を思い描き、「今、何のために学んでいるのか」を理解することができれば、学びそのものが主体的になる。実はここが非常に重要なポイントだと小林は強調する。

「21世紀型スキルにしても、学力の3要素にしても、高校・大学の一時期に学んで終わりという性質のものではありません。変化する時代を生き抜いていくためには、生涯学び続ける『アクティブラーナー』であることが何より重要になります。そのためには、早い段階で自分のキャリアを設計し、主体的に学ぶ姿勢を養うことが重要なのです」

また、地域や企業との連携も含めて、外部の人と触れ合うこ

図6 大学が策定する3つのポリシー



とによる直接的な刺激は、より目に見えるレベルで高校生を変えていく力をもっている。

「よく、『今の若い世代は異なる世代とのコミュニケーションが下手』と言われるますが、これは単純にその機会が減っているから。機会さえ提供すれば高校生は急速に変化していきます。この成長力こそが若い世代の特徴なのです。これは大学生にもいえることですね。自分より年下の高校生に、わかりやすく教える、説明するという経験を通して、自分が学んでいることをより深く理解し、成長することができます」

大学での学びを実際に経験することで3つのポリシーに対する理解も深まる

高校生が主体的に学び、自らの進路を考える視点を身につけることができれば、偏差値や知名度以外の観点で大学を選ぶことが可能になる。そこでポイントになるのが、2017年度からすべての大学に明示することが義務付けられた「3つのポリシー」(図6)だ。大学や学部が、どのような人材の育成を目指しており(ディプロマ・ポリシー)、そのためにどのような教育を行い(カリキュラム・ポリシー)、それに向けてどのような人の入学を求めているか(アドミッション・ポリシー)を理解したうえで、志望校を選ぶことができれば、高校から大学、そして大学から社会への接続はよりスムーズになる。

「ただし、高校生が文章だけで各大学の特性を理解することは難しいと思います。だからこそ、高校生の段階で、実際に大学での学びを経験し、その経験を通して大学の教育の特色や魅力を知ることが大切なのです」

大学もこの点を意識して、高校生を対象にした活動に力を入れ、取り組みの内容も多様になってきている。高大接続の鍵を握るアプローチとして、その動向が注目される。